



## 1948 年京都・島根 ジフテリア予防接種禍事件（その 1）

栗原 敦

### 知られざる戦後薬害第 1 号事件

1948 年 11 月に京都市および島根県東部で実施されたジフテリア予防接種において、84 名の乳幼児死亡を含んで 1,000 人規模の被害を生み、世界の予防接種史上最大の事件となった。製造企業が予防接種液の製造過程で無毒化とロットの取扱いを誤り、品質管理＝安全性確保において最後の砦である国家検定の試験品抜取りに重大な誤りがあり、それこそが大惨事の原因だったと考えられる。しかし刑事訴訟ではメーカーである財団法人大阪日赤医薬学研究所の所長以下 3 名が有罪、試験品抜取り担当者である大阪府職員は無罪となり、国など行政が強圧的に解決を図ったため民事訴訟は提起されず、国家検定に関する国の責任は問われなかった。その結果 70 年代に京都府・市の議会や国会で補償問題が再燃したが「和解済み」を理由に実ることなく風化の一途をたどってきた。事件から半世紀余りを経て、生存被害者らによる遺族訪問調査、国会会議録、厚生労働省・京都府・島根県・京都市などの行政文書と GHQ/SCAP 文書、その他の文献に関する総合的な調査が行われ、真相解明なく忘れ去られようとしていた戦後薬害第 1 号事件の実相が見え始めてきた。

### プロフィール

私はここ 20 数年長男のおたふくかぜワクチン（阪大微研会製）接種後の副作用被害（1983,

てんかん・知的障害など、1986 救済、現在障害年金 1 級受給) を体験したことから、救済をはじめとした薬事行政、そして予防接種行政にも強い関心をもちつづけてきました。そして自ずと 93 年から MMR (麻しん・おたふくかぜ・風しんの新 3 種混合ワクチンのこと。89 年導入、メーカーの薬事法違反、副作用多発で 93 年 4 月接種見合わせとなった) ワクチン被害者の訴訟をわがことのごとく支援することになりました。(この事件の国と財団法人阪大微研会の責任が 06 年 4 月の大阪高裁判決で確定したので薬害 MMR 事件とよぶことを提案しています。) その過程で 99 年 10 月全国薬害被害者団体連絡協議会 (略称: 薬被連) 結成に参加 (MMR 被害児を救援する会として)、主に医薬品副作用被害救済制度について取り組んでいます。ワクチンの副作用被害者、医薬品副作用被害救済制度の対象者を介護する家族という立場です。

### 当初の問題意識

1993 年ごろに京都府立総合資料館で、京都府衛生部『京都ジフテリア予防接種禍記録』(発行者・大田黒猪一郎、発行所・京都府衛生部 577 ページ 1950 刊、以後「記録」とよぶ) の存在を知り、さらに事件に関する当時の行政文書も保管されていることを確認しながら、目前の MMR 事件と我が子のてんかん治療や救済の問題に追われていたため深く追求することなく経過しました。その裏には「ひどい事件だなあ。でも戦後の混乱期のことだから・・・」という意識、先入観や独断があったのでしょうか。また一方でよくも行政 (京都府) がこのような記録を残したものだという驚き、不思議な感じをもったことも記憶しています。なぜなら、現代に厚生省編『薬害エイズ事件』、厚生省編『種痘禍』などの刊行物が存在するはずもないからです。実はのちに述べますが、「記録」が刊行された理由はなんと厚生省が指示をしたことによるのです。

### 生存被害者との出会い

記録との出会いから 10 年余り後、03 年 3 月に MMR 訴訟大阪地裁判決 (二家族勝訴) がでた翌 04 年 1 月に、田井中克人著『69 人目の犠牲者』(ウィンかもがわ 2003 刊) を知り強い衝撃を覚えました。1948 年京都市で 1 歳にして生死の境をさまよいつつ生きのびた田井中さんが、お父さんの没後、書き残されたものからはじめて被害の事実を知り、困難をおして遺族訪問・聞き取りを中心にまとめたものです。いたたまれずにその 3 月に田井中さん宅を訪問することになりました。それを契機にお二人の生存被害者、安田さん (京都市)、和気さん (つくば市) とであい、私自身のつながりであった土屋さん (宇治市) が死亡児のご姉弟で、お母さんもご存命であることが判明しました。

田井中さんの著作は 05 年に改訂され『京都ジフテリア予防接種禍事件 69 人目の犠牲者』(新風舎文庫)、事件の原因や責任に関する見解が深まりました。

### 事件当時の行政文書・映像の発見

その作業と平行して事件当時の行政文書が大量に確認されていきます。05 年 3 月、私がふと厚労省の情報公開ファイルを検索した結果、なんとこの事件の 9 冊の簿冊 (のちに 10 冊となる) が、いとも簡単に発見できたことも衝撃的でした。また、京都市役所でマイクロ化 (5000 コマ) された文書、島根県庁で患者表を含む 3 冊の簿冊が存在することが矢継ぎ早に

明るみに出ます。京都府立総合資料館が所蔵する文書は京都府庁文書であり、われわれの声に  
 応えてなんと 04 年度途中から保存と公開のための複製づくりに着手され、05 年 4 月には個人  
 情報をマスキングした上で複製の公開が実現するという同館の英断がありました。さらに  
 1949 年 4 月京都市で開催された伝染病学会（現日本感染症学会）で行われた被害児に関する  
 医学的発表の抄録、また、この時期の伝染病対策を指示した GHQ/SCAP 文書への調査にも着手  
 しました。研究史上唯一人、同文書と「記録」により事件の輪郭を描いた渡部幹夫氏（順天堂  
 大）と出会うこともできました。文献資料のみならず、当時の「日本ニュース」（映画館で上  
 映された）に 1 分ほどの映像が残されている（現在は NHK 所蔵）こともわかり、川崎市民ミ  
 ュージアムで視聴することができました。これものに述べますが、1948 年 12 月のフィルム  
 配給・上映の直前に GHQ の意向を受け厚生省の圧力により一部削除されており、その問題は国  
 会でもとりあげられました。

### 現在の問題意識

05 年 5 月に医師、研究者、弁護士などに協力を求め、より確かな真相解明になることを願  
 い 10 数名からなる「京都・島根ジフテリア予防接種禍事件研究会」（代表 山本繁）を結成し  
 6 回の研究会を重ねてきました。

戦後の混乱期だからという意識から抜け出し、GHQ の感染症対策、新憲法下に制定された  
 「強制無補償」の予防接種法により国民の人権が蹂躪されるという事実、および被害者の救済  
 = 人権の回復を求める運動の系譜のなかに位置づけながら真相を解明したいと考えています。  
 予防接種の被害の事実や被害者の動向が浮上するのが 1970 年の種痘禍以後であり、被害児の  
 父の一人吉原賢二氏（東北大学名誉教授）の著作『私憤から公憤へ 社会問題としてのワクチ  
 ン禍』（岩波新書 1975）がこの問題の古典的名著とされ、1948 年の事件についてもかなり言及  
 しています。いっぽう、『予防接種禍と行政の責任—これでは子供や孫に予防接種を受けさせ  
 られない』（予防接種被害者恒久対策協議会 1990 刊、執筆は被害児の父である野口正行氏と見  
 られる、同氏は最初の訴訟を提起した）が行政のあり様を厳しく分析・批判しているが出版形  
 態からか世に知られていません。この両著を基本に私たちの収集した資料・検討を加えて、戦  
 後の GHQ と伝染病対策、予防接種法制定、現在までの被害者運動などを総合的にとらえつつ、  
 この事件を解明していきたいという、力量をはるかに超える構想をもちだしています。予防接  
 種法の制定過程（GHQ と厚生省の協議、国会審議など）を GHQ/SCAP 文書の検索から調査する  
 ことはこれまで行われていないようです。

この事件の被害者らが「補償法の制定」を要求したにもかかわらず、1970 年の閣議了解に  
 よる救済措置、1976 年予防接種法改正による救済の制度化まで長期にわたり被害者が放置さ  
 れ続ける、その背景を考えたいのです。

（くりはら・あつし 全国薬害被害者団体連絡協議会／  
 京都・島根ジフテリア予防接種禍事件研究会）



その被害者が半世紀を経て真相解明に立ち上がり、国が巧妙に責任逃れを図った『文書』を発見しました。

57 年も前、多くの犠牲者を出しながら、その後忘れ去られた『事件』がありました。

田井中克人さんは、1 歳の時にその事件に巻き込まれ、あやうく命を落としかけた一人です。

今年、勤めていた京都の定時制高校をやめ、事件の調査に歩き回る日々です。



#### 〈田井中克人さん〉

「(腕を見せながら) こんな形です」

#### 〈被害者の長澤和子さん〉(島根県)

「(腕を見せて) 私はこんなんです」

その『事件』とは、1948 年にジフテリアの予防接種を受けた子どもたちが次々に死んでいった『薬害事件』のことです。なぜか京都府と島根県だけに被害が集中し、合わせて 84 人が命を落としました。進駐軍による占領下の時代、GHQ は日本の不衛生な状態を嫌い、子どもたちに強制的に予防接種を受けさせたのです。



#### 〈被害者の石本敬子さん〉(島根県)

「私は整形を 3 回。今はここまできれいになったが、穴が開いて、骨が見えて、肉が溶けてた。父は、主治医に『敬子さんの右腕を切断しましょう』と言われたが、あまりにもかわいそうだと手術を断った。その後、奇跡的に助かって、右腕がこうしてひっついている。改めて父に感謝しています」

57 年も前の古傷をえぐるように証言を拾い集める作業です。話を聞き終えるころには、いつも、ぐったりした気分になってしまいます。

#### 〈田井中克人さん〉

「人間、歳をとると色んな人に『生かされている』感覚。亡くなった子どもの犠牲の上に今の我々の生がある、という思いだけで行動している」

田井中さんが予防接種を受けたのは、1 歳 2 ヶ月の時でした。

意識を失い、マヒが残るほどの重症でしたが、回復してからは、あえて家族も話題にすることはなく、そのまま歳を重ねました。

ところが、数年前、父親の遺品の中にある書き込みを見つけ、改めて意識するようになったのです。

～田井中克人さんの父親の「備忘録」より～

『克人ジフテリア注射』

「幼子の予防ジフテリア注射の時、ワクチンに何か混じっていたのか、不明な液が注射され、小児マヒ状態のようになり…。危篤状態は再々あったが…。命は取り替し…。その時の父母の喜びは言語では表わす事は出来ない」

#### 〈田井中克人さん〉

「これを読むと、自分が思っていた以上に大がかりな事件だと感じたんです。自分も『本来ならば死んでたのではないか』という思いですね」

新聞記事を集め、文献を読みあさるうちに事件の姿が見えてきました。

被害の原因は、消毒（無毒化のことです—引用者注）が不十分でジフテリア菌が残ったままのワクチンが、ズサンな検査をすり抜けていたことでした。

まず、汚染されたワクチンが使われた京都府で子どもが次々にジフテリアを発症し、その後注射を継続した島根県で被害が拡大しました。

ところが、裁判では製薬メーカーの社員だけが有罪になり、検査の責任を負うべき厚生省への追及がなされないまま、事件の幕引きが図られていたのです。

### 〈田井中克人さん〉

「厚生省からすれば『うまく乗り切った』ということになる。『乗り切った』ということが、その後の厚生省の体質を作ったんじゃないか。こういう事件があったということと同時に、今の厚生省（の隠ぺい体質）を作った原点だと、社会に訴えたい」

田井中さんの調査には、同じジフテリア事件やその後の薬害の被害者当事者らが賛同し、研究会が作られました。

歴史から何も学び取らず、薬害を繰り返してばかりいる国に、ジフテリア事件の持つ意味を突きつけてやろう。

そんなメンバーの思いが、ある決定的な文書の存在を突き止めたのです。

～当時の法務庁の見解～

「厚生次官殿。被害者より国を被告として訴訟が提起された時には、国は敗訴を免れないかと思われる。この際、国としては相当額の慰謝料を支払い、訴訟の提起を防ぐことが得策と考える」

当時、国は自分たちがミスを犯し、それが原因で多くの犠牲者を出したことを認識していたのです。

それゆえ、『見舞金（死亡者には最高 10 万円）』を出して、被害者の口封じをはかったのです。



田井中さんは、これまで訪ね歩いた遺族の声を本にまとめました。

表紙には幼子の遺影を選びました。

田井中さんと同じ1歳で予防接種を受け、2歳にならずして亡くなった河村正君です。

### 〈亡くなった河村正君の母・河村スエノさん〉（京都市）

「何ひとつない時分で、母乳だけで育てて、これからという時に…。他の人と同じように生まれながら、かわいそうにと思う。事件を調べて、本にさせていただいて幸せです。御礼のしようがない…」

### 〈田井中克人さん〉

「この事件が現在起きていたらどうなっていたのか。そう考えると、昭和 23 年（1948 年）当時、『人間の命が軽く扱われていた』という思いを強くした。それゆえに、今受けた生を大切にしたい。行動を起こし、人に出会うたび、その思いを強くしている」

戦後間もない混乱の時期に、短い生涯を閉じた子どもたちの命はそんなに軽いものだったのでしょうか。

歴史の中に埋もれてしまった悲惨な薬害事件に、今再び、光が当てられようとしています。



[次号につづく]